

未来につなぐ新たな挑戦の場

初めてのパッケージ制作で知った難しさと楽しさ

2022年、パッケージデザインに興味のある学生なら誰でも参加でき、デザイン性や創造性を競うコンペティション「日本パッケージデザイン学生賞」が創設された(主催:公益社団法人日本パッケージデザイン協会)。「つなぐ -Connect-」をテーマに開かれた第1回は、全国の大学や専門学校から300点を超える作品が寄せられ、2度の審査を経て21点の入賞作品が選ばれた。入賞を果たした5人の学生による座談会を企画し、パッケージ制作の難しさと楽しさについて話を聞いた。

座談会参加者(敬称略)

中野 亜美 / 大阪成蹊大学(大賞)

松下 翼 / 大阪成蹊大学(牛島志津子賞)

佐野 彩芽 / 大阪成蹊大学(松井健朗賞)

石井 友規 / 香川大学(金賞・フジシール財団賞)

伊勢田 乃愛 / 香川大学(フミ・ササダ賞)

——日本パッケージデザイン学生賞2022に参加したきっかけは?

中野 私と佐野さん、松下さんが所属する大阪成蹊大学造形芸術学科のビジュアルデザインコースは、ブランディングやロゴ、ポスター制作など幅広いグラフィックを学びま

す。今回のコンテストは、必修課目の「造形芸術専門展開演習3」という授業として、2年生全員が参加しました。

佐野 コンテストの1次審査は、作品の原案を提出することが課題でしたが、4月にスタートした授業では、前期課程修了までに作品を形にし、写真を撮って提出することが課題でした。1次審査に合格すると、単位取得後の夏休みも作品を作り続けました。

石井 私と伊勢田さんが籍を置く香川大学では、選択科目の一つで必修ではなかったのですが、私はプロダクトデザイナーになりたいという夢があり、実務経験の一つとしてコンテストに参加するため履修しました。

伊勢田 私たちの所属する造形メディアデザインコース



左から中野さん、松下さん、佐野さん(大阪成蹊大学)



〔大賞〕『高齢者のための手の届く電球』

パッケージは、商品包装の役割はもちろん、取り替え時に高さのある台を使用せず、電球の取り替え補助の役割を果たす。



〔牛島志津子賞〕『制服をつなぐ』

まだ着用できる制服をリサイクルし、次の世代につなげるパッケージ。どのようなものが入っているのか、中身ごとにデザインを変えている。上端のマークで、制服の品質を5段階で示している。

〔松井健朗賞〕『重さをシェアする米袋』

お米のような、重量のある荷物を二人で持つための袋。中央には買い物した商品を入れることができ、人と人をつなぐ。



の授業は、プロダクトの授業や映像（メディア）系、プログラミングの授業もありますが、私は生活の中のデザインに興味を持っており「生活のデザイン」という授業名にひかれて受講しました。“求められた以上のことをする”という教授の指導の下、1次審査までの期間に作品と売場のPOPを制作しました。2次審査では作品をさらにブラッシュアップさせ、提出しました。

さまざまな“つなぐ”を連想した作品作り

—— “つなぐ -Connect-” というコンテストのテーマについてどんなことを考えましたか？

松下 服が好きなので、ファッションや古着で“つなぐ”ことができないかを考え、制服に焦点を当てました。作品のコンセプトはすぐに決まったのですが、“つなぐ”をどのようにパッケージで表現するかに時間をかけました。

佐野 作品案がまとまるまで、時間がかかりました。アイデアの切り口として、社会問題から何かできないかと考え、男女や年齢の差別、不平等という観点から作品を作りました。

石井 コンテストへの参加自体が初めての経験だったので、最初は何をしたらよいのか分からない状態でした。さまざまなものと関連付けながら、自分の土俵で何かできないか考えました。私はカフェでアルバイトをしていたので、

絞り袋からクリームを出す動作をヒントに、今回の作品を考え始めました。

伊勢田 “つなぐ”と言っても「人と人をつなぐ」という結び付きや、「未来につなげる」といった活動を意味する場合もあり、コンセプトを一つに絞ることは難しかったです。アイデア出しで行き詰まっていた時、先生から「地域に関係したもので良いのではないか」という助言をいただき、出身地の香川県とつなげられるものはないか考えました。

——ご自身の作品について教えてください。

中野 高齢者は、1人で電球を替えることが難しく、業者に頼むのもおっくうなので、暗い部屋で生活している人がいるという問題があることを知り、パッケージでこの問題を解決することをコンセプトとして作品を作りました。パッケージを利用して、電球の付け外しができればと思ったことがきっかけです。パッケージが瓶の形になっていて、電球を下向きにして販売することを想定しています。付け替え時に、電球を180度回転させ、瓶の細い部分を持ちながら回すと、高さのある台を使用しなくても片手で簡単に回すことができます。

パッケージに使用している段ボールは、電球を支える耐久性が課題で、電球の重さに負けてしまったり、回して使うと電球が動いてしまい、思い通りにいかず苦戦しました。また、持ち手の持ちやすさや、取り換え時の電球までの距離、パッケージの長さの計算にも苦戦しました。日本は高齢化社会ですが、人口の多い高齢者が困っていることを解決したいという思いで作りました。

松下 学校指定の制服は、一式買い揃えることが多いですが、決して安価ではない上、長くても3年しか使用しま

せん。アパレル業界では、衣類の大量消費が問題になっていることから、制服を1点ずつ販売するパッケージを作り、安価に制服を購入できる仕組みを作ることで、廃棄量を削減し、次世代につなぐ販売プロセスを構築できるのではないかと考えました。

リサイクル商品は、新品に比べると汚いと思われることを考慮し、あえて中身を見せて内容物の状態の良さが一目でわかるようなパッケージデザインにしました。

実際に制服を入れるパッケージを作ろうとした時、サイズの調整や素材選びに苦労しました。最終試験では、3Dデータを使用し、パッケージデザインを3Dでうまく見せられないか模索して制作しました。

佐野 重量物なのに1人で持つことがほとんどの米袋に取っ手を付け、2人で持てるパッケージを考案しました。さらに、真ん中に買い物したものを入れられるようにすることで、重いものを持つ負担を分散させています。大学の授業では、見た目を重視したデザインを多く学んでいましたが、パッケージは機能も重視しなければなりません。見た目と機能を両立させる作業は、経験が少なかったこともあり、難しいと感じました。

石井 「命をつなぐ」という観点から、魚を使ったつみれのパッケージを作りました。つみれなどの加工食品は、魚本来の姿を見ることがないので、命をいただいているということが感じにくいのではないかと思います。調理時に「命をいただいているんだな」ということが伝わるような、魚の形をしたパッケージを作りました。魚形の絞り袋のデザインや表面装飾は、図形を重ねて作っています。

伊勢田 国内で生産される木桶で作られるしょうゆが全体の1%まで落ち込んでいることから、「香川県の小豆島



石井さん(左)と伊勢田さん(香川大学)



〔金賞・フジシール財団賞〕『しぼりざかな』
 原材料を目にする機会が少ない加工食品のつみれにそれぞれの魚をデザインし、命をいただいていることが実感できるパッケージ。



〔フミ・ササダ賞〕『5つの醤油』
 国内で生産されるしょうゆで、1%しか作られない木樽で作る小豆島のしょうゆを、次世代につなぐ。

で作られているしょうゆを伝える」というコンセプトのもと、作品を作りました。制作のためにさまざまなことを調べると、しょうゆ樽を知らない人もいることが分かり、存在を伝えたい、次の世代にもつなげていきたいと思いました。また、発酵時間や材料の違いで色や味が5種類に変化することを知ったので、こうした「しょうゆ自体のつながり」も伝えたいと考えました。パッケージは、「ラベルシールにIllustratorのデータを印刷し、ナイロンに貼り付けると液体のようになる」という教授の助言を参考に、リアルさを追求しました。

液体食品のパッケージをどのように作ればよいのか分からず、制作にはとても苦労しました。授賞式では、作品を選んでくださったフミ・ササダ氏とお話できるタイミングがあったのですが、プロのデザイナーでも液体食品パッケージを作るのは難しいとおっしゃっていたことが印象的です。

作品を客観視しながら作る難しさを実感

——コンテストの参加を通し、“パッケージ”に対する考え方に変化はありましたか？

伊勢田 自分でアイデアを出し、作るところまで経験してみると、パッケージはさまざまなことを考えながら作られているものであると実感しました。作り始めると楽しくなり、新しい自分の発見につながったと思います。

松下 自分が作品を作る立場になり「どうしたら相手の手が取ってくれるのか」など、客観視しながら作っていくことが難しいと思いました。

作り手が仕組みや意図を分かっている、コンセプトを知らない人が見たら、どう感じるのかを考えなければならぬということを実感しました。

中野 これまではポスターやロゴ、ブランディングに興味があり、パッケージにはそこまで……という思いでした。コンテストに参加したことをきっかけに、日常的にパッケージを気にするようになりました。友人との買い物でも、パッケージについて会話が弾むことが増えました。パッケージは商品を一目で伝えているという点にも面白さを感じ、パッケージに対する見方も変わったと思います。

(聞き手・取材：編集部・竹内 万由)

※作品の画像提供「年鑑日本のパッケージデザイン2023」(六耀社刊)